

## 2022年度第17回石本賞選考結果報告

「石本賞」選考作業部会長  
柏端達也

石本賞は、石本新氏のご遺族の寄付金をもとにした事業の一環として2006年度に創設されました。当該年度から遡り過去3年間に『科学哲学』に掲載され、掲載決定時において40歳未満の著者による論文が、または科学哲学関連分野での博士の学位取得後8年未満の著者による論文のなかから優秀作一篇を選び、著者の研究活動を支援・奨励することを目的としています。

これまでの受賞作は以下のとおりです。

- |      |        |   |
|------|--------|---|
| 第一回  | 青山 拓央  | 「時制的変化は定義可能か——マクタガートの洞察と失敗——」   |
| 第二回  | 三平 正明  | 「フレーゲ：論理の普遍性とメタ体系的観点」   |
| 第三回  | 前田 高弘  | 「知覚経験の対象としての性質」   |
| 第四回  | 大塚 淳   | 「結局、機能とは何だったのか」   |
| 第五回  | 山田 圭一  | 「ウィトゲンシュタイン的文脈主義——壊れにくい知識モデルの構築をめざして——」   |
| 第六回  | 小草 泰   | 「知覚の志向説と選言説」  |
| 第七回  | 佐金 武   | 「現在主義と時間の非対称性」  |
| 第八回  | 大西 勇喜謙 | 「認識論的観点からの实在論論争」  |
| 第九回  | 秋葉 剛史  | 「Truthmaker原理はなぜ制限されるべきか」   |
| 第十回  | 細川 雄一郎 | 「反事実条件文推論の動態論理による形式化」   |
| 第十一回 | 北村 直彰  | 「存在論の方法としてのTruthmaker理論」  |
| 第十二回 | 榊原 英輔  | 「What Is Wrong with Interpretation Q? : A Case of Concrete Skeptic's Alternative Interpretation of Algebra」 |
| 第十三回 | 鴻 浩介   | 「理由の内在于主義と外在于主義」  |
| 第十四回 | 李 太喜   | 「選択可能性と「自由論のドグマ」」   |
| 第十五回 | 高谷 遼平  | 「主張内容を合成的に導く——一般合成性に基づく単純な意味論観の擁護——」  |
| 第十六回 | 石田 知子  | 「「遺伝情報」はメタファーか」   |

そして、今年度の受賞作は54巻1号に掲載された次の論文に決定しました。

### 飯川 遥 「規則のパラドックスに対する懐疑論的解決とは何だったのか」

本受賞作は、クリプキのいわゆる「規則のパラドックス」の懐疑論的解決への批判に対して効果的な反批判を行ない、懐疑論的解決が、通常言われるよりも整合的で意味のある立場として解釈しなおせることを丁寧に示した、たいへん意欲的な論稿であると評価することができます。

以下、本受賞作の内容とそれに対する評価をさらに詳しく述べます。

クリプキが『ウィトゲンシュタインのパラドックス』で提起したパラドックスについては、これまで多くの議論がなされ、多くの論文が書かれてきました。本受賞論文は、そのパラドックスに対するクリプキ自身の「懐疑論的解決」を、ある意味、ある仕方で、擁護するものです。

懐疑論的解決に対しては論争史上継続的な批判が寄せられています。本受賞論文が主として念頭に置くのは、クリプキのその解決に対するアレクサンダー・ミラーによる解釈と批判です。ミラーは、懐疑論的解決の立場が「準実在論」——ブラックバーンが道徳に関して展開した立場——の一種として解釈できることを指摘します。そしてその解釈のもとで懐疑論的解決がいくつかの困難を含むことをミラーは指摘します（ミラーによる困難の指摘は、懐疑論的解決の自己論駁性を指摘する従来有力視されてきた批判の流れを汲むものでもあります）。

著者の飯川氏は、準実在論との類比を引き受けつつも、ミラーによる懐疑論的解決批判には対抗する形で応えていきます。そのために飯川氏は、ヒュー・プライスの「全面的表現主義」を、類比しうるもう一つの枠組みとしてあらたに位置させます。興味深いことに、飯川氏はそこで、懐疑論的解決の立場をそのまま全面的表現主義の一種とみなすことはしません。そうではなく、準実在論と全面的表現主義という類似しつつもそれぞれに異なる立場との対比のもとで、懐疑論的解決をあらためて吟味し、再構成することを試みます。そしてその解釈に基づいて、懐疑論的解決が指摘された困難を回避しうることを示そうとしています。

本論文が評価された一つの点に、扱われるトピックの意外な広さがあります。一読者としての印象を述べるならば、おなじみの規則遵守問題の話だと思って読んでみると、新しい観点や道具立てが次々と導入され、視野が予想外の方向に段階的に開けていくという、魅力的な読書体験ができるテキストになっています。結論部に関しては、本論文により整合的に解釈しなおさ

れた懐疑論的解決がどのような意義をもつのかについて、もうすこし具体的な示唆があってよかったのではないかという（期待を込めた）不満も出されましたが、総じていえば本論文は、規則のパラドックスをめぐる一連の論争に独自の観点を持ち込み、議論を一步進めることに成功した優れた論文であるという点で、選考委員の意見が一致しました。

最後に、選考の手順と経過を簡単に述べておきます。最初に、7月の編集委員会で第一次選考を行ないました。そこで審査対象となりうる17篇の論文から、総合的な考慮と評価によって、

- 北村直彰・森田紘平「存在的構造実在論の概念的基礎と経験的根拠」  
（自由応募論文：52巻1号（2019）掲載）
- 須田悠基「真理の多元主義は実質性を保てるか」  
（自由応募論文：53巻1号（2020）掲載）
- 佐藤広大「間違った種類の理由と毒パズル」  
（自由応募論文：53巻1号（2020）掲載）
- 伊藤 遼「初期ラッセルの存在論における世界の十全な記述可能性」  
（特集テーマ応募論文：53巻2号（2020）掲載）
- 飯川 遥「規則のパラドックスに対する懐疑論的解決とは何だったのか」  
（自由応募論文：54巻1号（2021）掲載）
- 清水右郷「トランスサイエンス概念をつくりなおす」  
（自由応募論文：54巻1号（2021）掲載）

この6篇を石本賞の授賞候補論文とすることが決まりました。

続いて、編集委員長を部会長とする今年度石本賞作業部会を発足し、9月から10月にかけて、作業部会メンバーで第二次選考および最終選考を行ないました。第二次選考としてはまず、選考委員のそれぞれが、上記6篇のなかから2篇ないし3篇を、理由を付けて選び出しました。その選出評を委員間で相互に検討し、協議を経て、そこから比較的评价の高い伊藤論文と飯川論文を最終選考に残すことにしました。次に最終選考として、決められた持ち点を各選考委員が2論文のそれぞれに自由に配分する形式の投票を行ない、その結果、飯川論文が授賞作に輝きました。なお、候補に挙がっていた諸論文は、最終選考に残った伊藤論文にかぎらず、いずれもが非常に高く評価できる点を備えたものであったことを申し添えておきます。

2022年度の石本賞作業部会メンバー（選考委員）は以下の5名でした。

大塚淳、柏端達也（部会長）、金杉武司、中川大、横山幹子。（五十音順）